

自分たちのライフスタイルに合わせて やりたいことが出来る場所

那須町北部に移住

加川さんご家族

那須高原に建つレストランを夫婦で経営。夫の加川邦典さんは宮城県生まれ。少年時代は福岡県で過ごし、移住前は横浜市で勤務。2016年に那須町へ移住する。

料理人として、那須町の野菜の美味しさ、子育て環境に魅力を感じて那須町に移住した加川さん夫婦。

「いつかはどこかで独立したいという気持ちがありました。自分の中で、どこに行ったら何を売りにしようかとずっと考えていたんです。」

夫の加川邦典さんは横浜市で飲食業界に身を置いていたが、妻の絵里菜さんの出産を機に独立を考えた。どこでお店を始めるか：横浜市か、少年時代を過ごした福岡県、絵里菜さんの出身地である那須町か、横浜市は楽しいが、自分たちの生活環境や収入面を考えると子育てに向いていないと判断し那須町を選んだ。移住の決め手となったのが那須町で育てられた野菜であった。

「この野菜の美味しさを多くの人に伝えたい。」

野菜の美味しさに感動した邦典さん。那須町なら自分の思い描く仕事像や家族像が実現できるかもしれないと思ったそう。横浜市で働きながら移住の準備を進める中、チャンスは巡ってきた。絵里菜さんの友人やご両親の協力もあり店舗兼住宅の物件に出会った。メインの通りから一本外れていて自分が理想とする雰囲気を持ち、家賃が横浜市に住んでいた時の1LDKとほぼ同額。「同じお金を払うのに、一つのお店を持って住めて庭が付いていて、全て揃って同じ額って。」邦典さんは理想的な形でお店を始められる環境を手に入れたのだ。

加川さん夫婦が移住してきたのは1月の中旬。雪の多さに驚き、まるで別世界だったと邦典さん。絵里菜さんは邦典さんに「都会にしか住んだことがないから那須町なんて絶対住めないと思うよ。」と話したという。絵里菜さんにとってはUターンになるが邦典さんは完全なる移住者。知っている人が誰もいない土地に来て暮らすことは不安も多いはず。イメージで移住者は冷たくされると思っていたそうだが、実際はそうではなかった。「どこから来たの?」「面白いもの教えてよ。」とみんなウエルカムだった。周りにも移住者が多かったので入りやすい環境だった。邦典さんは地元の方とのコミュニケーションを積極的にとることで地元のルールを覚えていった。近所付き合いの面でも、隣り合った住宅もなく「隣ってどこだっけ?」と思う程。逆を言えば近所間のトラブルがない、騒音トラブルもなく遅くまで営業しているも苦情は来たことはないそうで、ストレスなく営業している。

邦典さんが近所の方とのエピソードを話してくれた。お店のカギを締め忘れて出かけてしまった時があり、戻ってみると回覧板を届けに来てくれたおばあちゃんが店の前に座って見張り番をしてくれていた事があったそうだ。

「回覧板を届けに来たらカギも開いているし誰もいないから帰って来るまで待つたって...都会ではあり得ないですよね。」

那須町に来て色んな方に優しくしていただいている加川さん夫婦。那須町で感じた人の優しさ、温かさが有難かったと語る。

野菜の育て方も 食材の選び方も、全ては お客様を満足させたいから。

お店の敷地内にある畑で野菜を育てている加川さん夫婦。もちろん農業は未経験。畑のこと、野菜の育て方は先輩農家さんにアドバイスをもらったりとお世話になっていたそうだ。知り合ったきっかけは絵里菜さんの地元の友人であるお店のスタッフからの紹介だった。

「一番助けてもらいましたね。お世話になった方々の多くはそのスタッフの地元の知り合いからの紹介で、その知り合いからまた別の知り合いへと繋がり、どんどん輪が広がっていきました。」邦典さんは、農家さんから教えられた知識を吸収しながら

季節ごとの野菜やハーブの栽培と管理をし、今レストランや食品業界でトレンドとなりつつある地元でとれた旬の新鮮な食材を使い、季節ごとにメニューを変えていく《ファームトゥテーブル》を自ら実践しているという。そんな愛情を込めて育てられた野菜はお店で提供される料理に使用されている。



常に新しいことを考えながら 仕事に臨める環境。

このお店をオープンさせて二年半。自分がオーナーとなり横浜時代の何倍も忙しくなったが、自分の理想のお店を納得がいくまで作りあげることができるようになったことで精神面でも楽になり、充実感も得られるという。

那須町は観光地であることから、季節により仕事の忙しさが異なる。そこに都会とは違う、那須町でお店を開くことの楽しさや、魅力を見出した邦典さん。

「那須ライフって勝手に言ってるんですけど、観光客の多い夏は休み無く頑張ってるので、逆に冬は思いつ

きり休んでやろう！って。都会では出来ないですよ。」これは邦典さんが思う那須町の良さの一つである。

まとめて休みを取ることで、例えばお店の計画をじっくり考えたり、好きなアーティストのライブに行ったりと自分の楽しみにも自由に時間を費やせて、邦典さんとしては自分に合ったスタイルで働けるようになった。

「常に新しい物を提供していくためには、一つ先を考えないといけないんです。那須町で働く人たちはアンテナが高いので。」

移住当初邦典さんは、自分が最先端のつもりでいたが、周囲には当たり

前のように新しい情報を知っている人が多いことに驚いたそう。

「地方だけと色んなお店が最先端を走っているんですね。」地方は少し遅れていると思っていたそうだが、那須町はそうではなかったようだ。同業者間でのSNSでは、どこで情報を得たのか同じ料理を出していることもあったという。

「侮れない、地方に來たから安心だっというのではないです。」これが刺激となり気持ちが腐らず、常に都会にいた時と変わらない気持ちのままでいられてモチベーションも維持できるのだそう。



そんなに田舎じゃなかった。移住して邦典さんが感じた那須町の印象である。インターネットで欲しいものは手に入り、町内にスーパーやホームセンターもあり、割と移住のハードルが低い環境である。那須町は近隣の都市部にも近く、都内へのアクセスも良くそこまで不便ではないというが、スーパーやお店が閉まるのが早いこと、病院が遠いことはいざという時に困るそうだ。那須町は意外と広い。端から端まで行くと車で一時間以上はかかりどこへ行くにも車は必要になってくる。

子育てについては、「那須町は自然も遊ぶところも沢山あって空気も人も良いので子育てには優しい町だと思います。」と語る。

町では廃校になった小学校を複合施設として活用し、その施設の中には子ども用の屋内遊び場施設（わんぱくキッズランド）を完備。医療費も十八歳まで無料。こういった施設や制度には満足しているようだ。邦典さんの子育てへの思いは、「那須町で家族との思い出をずっと作っていきたい、それが子どもの記憶に残っていてほしい。」これにつくるようだ。

店舗は住宅も兼ねているので、家族の時間や子どもと触れ合える時間が作りやすい。「日々成長していく姿を見ることができる環境にいられるのが良いですね。」と嬉しそうに話す。

お店の営業が終わり子どもを寝かしつけた後、絵里菜さんとお店の話などをし、皆が眠りについてから翌日の準備をする。それからが邦典さんの時間。那須町へ移住する前は仕事から疲れて帰ってきて飲みながら寝てしまう生活だった。とても静かな那須町の夜。今では本を読んだり「明日の天気は晴れか」何しよう、草刈

自分の時間ができて、家族との時間も増えた。

りしようかな。」など考えながら寝る前の時間を楽しんでいる。

那須町へ移住して、家族との時間、自分の時間も増えて、自然を楽しみつつ仕事への気持ちも前に向かって進んでいくことができた。

周りにはお店がたくさんあるので負けれない！と仕事中は気を張って取り組める。やりたいことの最終的なゴール地点は一緒に、ゴールまでの道のりは一つではなくて、時には遠回りをする必要があることもある。その道のりの中で沢山のひとと知り合いになり、那須町に住む多くの先輩たちに助けられたこともあった。そのおかげで今こうして那須ライフを楽しみながら働いていると語ってくれた。



夏はオープン前に子ども用プールで遊んだり、通勤が無いのでその分を子どもと遊ぶ時間にしている。忙しい中でも家族や子どもとの時間が邦典さんには安らぎになっているそうだ。

